

「造られたものを通して」知るとはいかなることか

—アウグスティヌス『告白』第十卷第六章—

佐藤 真基子

一

人間は問うことができます。そして造られたものを通して神の見えないものを知り、見ることができます。

homines autem possunt interrogare, ut invisibilia dei per ea, quae facta sunt, intellecta conspiciant.

『告白』第十卷第六章十節

『告白』第十卷第六章におけるアウグスティヌスの右の言明において、「神の見えないものを造られたものを通して

知り、見る」とは、ロマ書一章二〇節から引用された言葉である。『告白』のこの巻が、「私はあなたを知りたい、私を知る者よ、私が知られているように私はあなたを知りたい。」という神への呼びかけから始められていることに明らかであるように、神を知ることがアウグスティヌスの切なる願いであり、探求の目的である。その神の見えない性質を被造物を通して知ることができるというパウロの言葉を、アウグスティヌスはどのように解釈しているのか。この問題を考えるとき、次の二点を明らかにしなければならないと思われる。すなわち、(一)『告白』第十卷第六章において言われている被造物を通して神を知る知り方は、神が

自らを知っているような知り方ないしわれわれが「顔と顔をあわせて」神を知る知り方と同じであるのか、あるいは異なるのか。異なるとするならば、この箇所で言われている知はどのような知であるのか。(二)「造られたものを通して」知るとはいかなることであるのか。「通して per」という言葉に、アウグスティヌスはいかなる意味を見出しているのか。

以上の点について検討するとき注目すべきは、ここでアウグスティヌスが聖書からの引用に先行して「人間は問うことができる」と述べていることである。「神の見えないものを……見る」ことは、接続詞「et」が導く従属文において提示されている。この従属文が「問うことができる」ことの目的であるにせよ結果であるにせよ、問うことと、神の見えない性質を知り、見ることが密接に関係づけられていることは明らかである。われわれはここで言われている「問う interrogare」とはいかなる行為として考えられているのか明らかにしなければならぬ。

二

「問う」ことがいかなる行為として考えられているかを明らかにするために、右の箇所「問う」と言われるに至るまでのアウグスティヌスの議論を追うことにしよう。第五章の終わりに、「自分について何を知っているかを告白し、また自分について何を知らないかを告白する」と宣言したアウグスティヌスは、第六章のはじめに、自分について次のように告白している。

疑わしい意識においてではなく、確かな意識 *certa conscientia* において、主よ、私はあなたを愛しています。あなたはあなたのことばで私の心を貫きました。そして私はあなたを愛したのです。しかし天も地も、それらの内にあるあらゆるものも、見よ、あなたを愛しなさいとあらゆる方向から私に言い、あらゆる人々に言うことをやめません。ですから
(人々は) 言い逃れられません。

「あなたはあなたのことばで私の心を貫いた」という表現は、オドンネルが指摘しているように、「あなたはずで^①に私たちの心をあなたの愛で射抜いていたので、私たちは内臓に突き通されたあなたのことばを帯びていました」という、『告白』第九卷二章三節における、回心直後の状態についての説明と一致しているとみることが出来る。第八巻における、「とりて読め」という言葉を聞いて聖書を開きまきまに回心する場面では、「安心の光が私の心に注ぎ込まれたかのように、疑いの闇はすべて飛び散った」と述べられていた。これらのことから、第十卷の右の箇所における、「疑わしい意識においてではなく、確かな意識において主を愛している」という言明が、回心後の状態を説明していることは明らかである。

しかるに、アウグスティヌスはすでに回心の体験を経て、確実に神を愛しているにも拘わらず、地や天、すなわち被造物すべては、神を愛しなさいと言いつづけると説明されている。まだ神を愛していない者に対してではなく、すでに愛している者に対して愛しなさいと言うことは、一見したところ無益なことのように見える。しかしアウグスティヌスの説明によれば、被造物が神を愛しなさいと言いつづける、

そのため人は「言い逃れられない」ことになる。人がいかなることから言い逃れられないと考えられているのかは右の文脈において必ずしも明らかではないが、被造物がすでに神を愛している者にも愛しなさいと言うことに、何らかの積極的な意義が見出されていることは確かであるといえよう。

「言い逃れられない」とは、先にわれわれが示した「造られたものを通して神の見えないものを知り、見る」という言葉と同じロマ書一章二〇節の言葉である。ロマ書の文脈では、人は被造物を通して神を知ることができるのであるから神を知らないと言いつづけることはできないということが言われていると解釈できる。アウグスティヌスは、被造物を通して神を知るといふこのロマ書の言葉を、被造物が人に神を愛しなさいと言うこととして解釈していると推測できる。以上のことを念頭において、次の議論を検討しよう。

三

ですが私は、あなたを愛しているとき、何を愛して

いるのでしょうか。

物体の形象 species や時間的なものの美飾 deous ではなく、この（肉体の）目に快い光の輝きではなく、あらゆる種類の歌の甘い調べではなく、花や練り香水や香辛料の甘い香りではなく、マナや蜂蜜水ではなく、肉の抱擁にとって好ましい肢体ではありません。私は私の神を愛しているとき、こうしたものを愛しているではありません。

しかしながら私は、神を愛しているとき、何らかの光、何らかの声、何らかの匂い、何らかの食べ物、何らかの抱擁を愛しています。それは私の内なる人間の光、声、匂い、食べ物、抱擁であり、「内」においては、場所を占めない光が私の魂を照らし、時間を奪わない声が響き、風が吹き散らさない匂いが香り、食欲を減らさない食べ物味わい、満足して離れることがない抱擁で結びつきます。私が私の神を愛しているとき、こうしたものを私は愛しているのです。

六章八節

アウグスティヌスは、自分は確かに神を愛しているが、神を愛しているとき自分は何を愛しているのかという問いを提示する。この問いに対して彼は、それは何らかの光、何らかの声といったものであるという答えを自ら与えている。

われわれは、アウグスティヌスが提示している問いは神を愛しているとき愛しているものは何であるかであって、神とは何であるかではないことに注意しなければならない。彼は自分がたてた問いに対して、それは物体の形象や時間的なものの美飾ではないと答えている。愛の対象として否定されているのは光や声や香りであって、それらを放つ源である光源や歌や花ではない。アウグスティヌスは、ものそのものと、人間がそれによってものの存在を捉える形象とを区別して論じているのである。人はたとえ花そのものを知らなくとも、その花から漂う香りを捉え、花が存在することを知り、花の香りを愛することができる。そして、花を愛するときその花の香りを愛していると語ることができる。しかし花の香りを愛していても、その花が何であるかを知っているとは限らないのである。

そしてアウグスティヌスは、神を愛しているとき愛して

いるものは物体や時間的なものの表象ではないと述べることによって、自らが、神を物体や時間的なものとみなしていないことを表明している。そうではなくて神を非物体的で非時間的なものとみなしていることを、「場所を占めない光」、「時間を奪わない声」などの表現によって説明しているのである。さらにそのような性質は身体感覚によって捉えられるのではないことが、「内なる人間」という言葉において示されている。

内なる人間は身体感覚とは異なり、非物体的な性質を捉える。しかし彼の説明によれば、「内なる人間」も感覚と同様、それが捉える対象はものそのものではなく、何らかの光や声である。このことから、内なる人間も、ものものを捉えているのではないと考えられる。光源を見なくとも目に心地よい光を捉え愛することができるように、神を完全な仕方では知っているのではなく、神に属する何らかの形象を「内なる人間」が捉え、神が存在することを知り、愛することができると考えられているのである。しかし神は、花が花本体と香りに区分できるような仕方では部分的に知られるようなものではない。したがって「内なる人間」が神に属する何らかの形象を捉えるとは、神を部

分的に知るということではなく、この世において知る仕方
で神についての何らかの知を得るということであると思わ
れる。このような、神を直接知っているのではないが、こ
の世において知る仕方では神を捉えそれを愛しているとい
う方が、アウグスティヌスが自らについて語る、「疑わ
しい意識においてではなく、確かな意識において主を愛し
ている」現在のあり方である。

四

神を愛している現在、神に属する何らかの形象をすでに
捉えそれを愛していることを明らかにしたアウグスティヌ
スは、さらに新たな問いをたてる。そしてこの問いについ
て、われわれが本稿第一節で注目した「問うinterrogare」
という表現が用いられている。

こうしたものは何でしょうか。私が地に問うたところ、
(地は)「私ではない」と言いました。そして地
にあるものは何であれ、同じことを告白しました。

et quid est hoc? interrogavi terram, et dixit:

《non sum》: et quaecumque in eadem sunt, idem
confessa sunt.

六章九節

新たにたてられた問いは、「これは何であるか quid est hoc」である。「これは何であるか」という問いに対する答えは通常、「これは〜である」であろう。しかし、問われた地の答えは、「私ではない」である。一見したところ、問いと答えがずれているように見える。この問いはいかなる問いであるのか。

「これは何であるか」の「これ」が指示する当のものは、前節において論じられた、何らかの光、声など、すなわち神を愛しているとき愛しているものである。先にわれわれが示したように、アウグスティヌスは、ものそのものと、人間がそれによってものの存在を捉える形象を区別して論じている。このことから、新たにたてられた問いにおいては、すでに捉えた形象が属している当のものが探求されていると推測することができる。当のものが探求されているとするならば、問いの答えは、「これは〜である」という仕方では表明されえない。というのも、「〜である」という

仕方では答えたとしても、その述語も何らかのものを指し示しており、ものそのものではないからである。かくして新たにたてられた「これは何であるか」という問いに対する答えは、ものそのものでなければならぬ。

この問いについては、前節における問いのように自問自答されるのではなく、地やその他被造物に問う interrogare ことがなされていることも、答えがものそのものでなければならぬと考えられていることを示しているといえよう。というのも、ちょうど香りの源である当の花を知るために直接花を吟味するように、アウグスティヌスは地やその他諸々のものに焦点を当てては、それが自らが神として愛している「これ」の源である、ものそのものであるかを否かを調べていると考えられるからである。じっさい、「interrogare」は、審問する、取り調べることを意味する言葉である。すでに捉えた神に属する何らかの形象と諸々のものを照らし合わせ、そのものが神自身であるか否かを吟味するのである。そして吟味の結果それらのものは探求している当のものではないことから、「これは何であるか」に対するそれらの答えは、「私ではない」というものであると解釈できる。

五

先の引用において、アウグスティヌスは地が「私ではない」と答えたと説明しているが、地がじっさいに人間の言葉を用いて答えたとは考えられないし、アウグスティヌスがそのように考えているとも思えない。では地やその他のものが問いに対して「答える」とは、いかなる事態であるのか。「答え」について次のように述べられている。

そこで私は、私の肉の外側を囲んでいるこれらすべてに、「あなたがたがそれではない、私の神について、私に言いたまえ。その何かについて私に言いたまえ。」と言いました。すると彼らは大きな声で、「その者が我々を作った。」と叫び声をあげました。私の問いかけは、私の志向であり、それらのものの返答は、それらのものの形象です。

六章九節

地をはじめとする感覚によって捉えられる事物の、「こ

れは何であるか」の問いに対する答えは、「私ではない」ばかりではない。被造物は、アウグスティヌスが探求している神は創造者であるという答えも提示する。このことを述べた上でアウグスティヌスは、問いは志向であり、答えは形象であると説明している。

われわれは先に、「これは何であるか」という問いは、事物に焦点を当て、それが自らが神として愛しているものそのものであるか否かを吟味することであると考えられていると解釈した。この解釈は、問うことは志向すること、すなわち注意を向けることであるという右記の説明とも一致している。しかし、問いにおいて探求されているのは形象ではなく、ものそのものであることは本稿前節においてすでに確認されたとおりである。このことと、答えは形象であるという上記の説明は一致していないように見える。しかし、例えば地を吟味するとき、地に直接触れたとしても地そのものを把握したことにはならない。ものそのものを探求するときも、人は対象を直接捉えるのではなく、感覚によって捉えられる形象を通してそれを認識する。このように考えると、人間の志向に対する事物の答えは形象であると説明することができる。

しかしここで言われている形象は、単なる事物の属性ではなく、何らかの仕方でそのものの本性を表しているものであると考えられる。というのも、「私ではない」という答えにおいて言われている「私」は、当のものが自らを指して語っていることだからである。形象がものの本性を表すのでなければ、ものそのものを探求する問いに対して、「私ではない」という答えはなされないであろう。というのも、当のものが「私」について「私ではない」と語るのと、認識する人間が、自らが認識した対象について「それではない」と判断することは別である。問うことによつて捉えられた形象がものの本性を表すものであるから、認識する人間が対象について「それではない」と語るのではなく、事物が自らについて答えるという仕方の説明されていると考えられる。

以上のことから、ものそのものを探求する問いによつて捉えられるべき形象は、ものの本性を表しているとみなすことができる。このように考えるならば、ものそのものを探求しているとき、その答えとして形象が与えられるという説明も矛盾を含むものではない。

また、被造物の答えである「形象」が、その事物の本性

を表すとはいへ、個々の事物がそれぞれ固有の本性を「答え」とする必要はない。というのも、探求されているのは被造物ではなく神であるからである。神を探求する問いに対する答えであるから、問われた被造物が答えるべきことは、神と自らの関係である。したがって、どの被造物に問うてもその答えは、被造物は神ではないことと、被造物は神によつて作られたということであると考えられる。

しかし、すべての人が、ものの形象を通してその本性を正しく捉えるとは限らないと思われる。「問い」と「答え」の関係について、さらに議論を検討しよう。

六

アウグスティヌスは被造物の答え、すなわち形象について次のようにも説明している。

完全な仕方で感覚を有しているあらゆる人々に、こうした形象はあらわれないでしょうか。(いや、あらわれる。)なぜ(こうした形象は)同じことを語らないのでしょうか。微小な動物も大きな動物も、そう

した形象を見ます。しかしそれら（動物）は、問うことはできません。それらには、感覚が告げるとき判断する者である理性が備えられていないからです。

六章十節

形象は感覚によって捉えられるものであるから、感覚機能をも有する人間以外の動物も、ものの形象を見ることができ。動物に対してもものは「それは私ではない。だがその者が私を作ったのである」と語っているといえよう。しかし答えを告げられたとしても、それを判断する理性を有していないため、動物は何が語られているかを理解することとはできない。またそもそも問いは、単にものに注意を向けることではなく、それが神であるかを調べ判断することであるから、動物は問うこともできない。それに対して理性を有している人間は、問い、語られたことを聞き、理解することができ。かくして、右の言明に引き続いて、「人間は問うことができます。そして造られたものを通して神の見えないものを知り、見ることができます。」と説明されているのである。

しかし、人間が皆神を探求しているのではないし、被造

物の「私ではない。だがその者が私を作った」という答えを皆が聞いているのではない。じっさい、神を探求していない人も、空間的で時間的な事物を神として崇めている人もいる。このことに対してアウグスティヌスは、「なぜ形象は同じことを語らないのでしょうか。」と疑問を呈しているのである。とはいえ、事物が形象を示したり示さなかったりすることはないのであるから、形象が同じことを語らないということはない。じっさいアウグスティヌスは、事物は全ての人に語っていると説明している。そして問うて形象を見ても、形象が語ることを理解しない人がいることを指摘して、次のように述べている。

じっさいには、全員に語るのですが、しかし理解するのは、外から受け取られたその声を、内的に真理と関係づける人々なのです。というのも、真理が、「あなたの神は地や空ではないし、いかなる物体でもない。」と私に言うからです。それらのものの本性 *natura* がこのことを言います。

六章十節

先に示されたように、形象はものの本性を表しているの
であるから、形象を捉えてもそれが語ることを理解してい
ない人というのは、ものの本性を捉えていない人のことで
ある。人はものの本性を知ろうとするとき、自らの外に本
性なるものを探すのではなく、感覚が捉えた形象を手がか
りとして自らの内面においてその本性を探索する。正しい
理解を得るか否かは、ものの形象に原因があるのではなく、
自らの内面における探索において分かれるといえる。アウ
グスティヌスが上述の説明において、真理と関係づける人
が理解すると述べているのは、本性について正しい理解を
得ることは、すなわち真なる知を得ることであるからであ
ろう。そして真なる理解が成立するとき、被造物の本性す
なわち「被造物は神ではない」ということの理解が成立す
ることから、先に地やその他の事物が語ると説明されてい
た言葉が、ここでは、真理が語ると言われ、また本性が語
るとも言われていると解釈できる。

ところで本稿第四節において示されたように、問うこと
は吟味すること、すなわちすでに捉えている神についての
何らかの知と事物の本性を照らし合わせ、それが神である
か否かを検討することであった。すでに捉えている神につ

いての何らかの知は、事物の本性を理解することが成立す
るためのいわば基準となつているといえよう。このことか
ら、内的に真理に関係づけて事物の本性を理解する営みと、
すでに捉えそれを愛している神についての知を基準として
本性を理解する営みは、等しいかあるいは密接に関係して
いるものであると考えられていることが推測される。

以上の議論から、被造物が「答える」という表現によつ
てアウグスティヌスが意味していることが明らかである
と思われる。すなわち、自らは神ではなく神によつて造られ
たということが、神との関係についての被造物の本性であ
るから、その限りで常に被造物はその本性を人間に知らせ
ている。先に示したように六章八節において「天も地も、
それらの内にあるあらゆるものも、見よ、あなたを愛しな
さいとあらゆる方向から私に言い、あらゆる人々に言うこ
とをやめません」と述べられていたことも、被造物が常に
人間にその本性を語っているということが説明されていた
といえよう。しかし誰もがその本性を理解できるわけでは
なく、被造物に問い、真理に関係づけて理解しようとする
者だけがその本性を理解することができる。すなわち被造
物は常に語っているが、人が「問う」ことによつてその語

りを聞いたとき、すなわち神を探求することによって被造物の本性を理解したとき、被造物の語りは「答え」として成り立つといえる。

七

今やわれわれは、神は被造物ではなく創造者であること、すずで知っていたアウグスティヌスが、被造物に問い、それに対して被造物が答え続けることの意義について考察することができ、確実に神を愛している現在のアウグスティヌスにおいて、被造物に対する問いの答えが「私ではない」であることは予想していたことであつたと思われる。すでに答えを知っていながら問い続けるということは、被造物が神ではないということを確認し続けることであるといえよう。被造物が神ではないということを確認し続けることには意味があると思われる。というのも、先に示されたように、アウグスティヌスは、問いながらも被造物が語る答えを理解しない人がいることを示唆していた。そのような人は、被造物が神ではないことを理解していない、すなわち被造物を神として崇めているような人である。被造

物が神ではないということを確認し続けるということは、被造物崇拜に陥らないということであり、また神を探求し、愛し続けるということを意味していると考えられる。

以上のことから、われわれは、「神の見えないところを造られたものを通じて悟り、あきらかに見る」というロマ書一章二〇節の言葉をアウグスティヌスがどのように解釈しているか考えることができよう。アウグスティヌスは、神に属する何らかの知を得ながらも、この世の事物とは無関係に自力で神を探求し続けることができるとは考えていない。人が被造物に「問い」、被造物が人に「答える」とすなわちその本性を知ることが、神を神として探求し続けることを可能にするともみなしている。こうした、神探求における被造物の積極的な役割を、アウグスティヌスは、「造られたものを通して」というパウロの言葉に読み込んでいると思われる。

アウグスティヌスの説明によれば、被造物が語るその本性は「(神は)わたしではない。創造者が神である」というものであった。神を、被造物とは異なる性質のものとして探求することを、被造物が促しているのである。こうした見解からみると、このロマ書の引用において述べられて

いる神の見えない性質の知り方は、この世において捉えられる知であると解釈できる。しかし、神を探求し続けることは、究極的な仕方では神を知ること、すなわち至福の生に至ることを可能にする。そうした神探求の持続を可能にしているのもまた被造物であると考えられていることに基づいて解釈するならば、この箇所で言われている知り方は、究極的な仕方すなわち「顔と顔を合わせて」知るような仕方である。かくして、アウグスティヌスは、パウロの言葉を一義的に解釈しているのではなく、重なり合う解釈をそこに組み込んでいるということがいえるであろう。

引用文献

Les Confessions, Oeuvres de Saint Augustin 14, texte de éd. de M. Skutella, Études Augustiniennes, Paris, 1996.

注

- (1) *Augustine/Confessions*, v. 3, commentary by J.O'Donnell, Clarendon Press, Oxford, 1992, p.166.